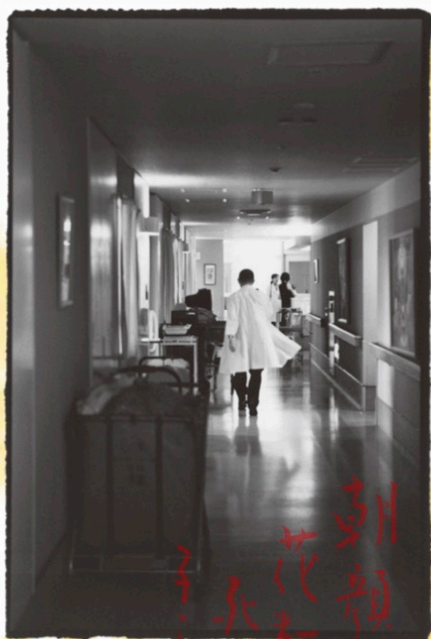


ヒューマンドキュメンタリー映画

『大丈夫。 -小児科医・細谷亮太のコトバ-』 プレスリリース

2011年
キネマ旬報文化映画
ベスト・テン
第1位



刻々の
さびしさの
涙を
吐き
出す

— 小児科医・細谷亮太のコトバ —

〈ドキュメンタリー映画〉
伊勢真一 演出作品

私は悲しいときに 泣けなくなったら
医者を辞めるべきだと思っています。

大丈夫。

製作/いせFILM スマートムンストン関連映画製作委員会
2011年/カラー/85分
<http://www.isefilm.com>



いせフィルム

TEL : 03-3406-9455 FAX : 03-3406-9460 メール : ise-film@rio.odn.ne.jp
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1-3-7 青山N-ブリックビル3階
HP : <http://www.isefilm.com>

大丈夫。

私は悲しいときに 泣けなくなったら
医者を辞めるべきだと思っています。

マミちゃん、どれくらい頑張ればよいかは
神様が決めてくれる。
マミちゃんが耐えることの出来る苦しみしか
神様はくれないから、
心配しなくていいよ。
大丈夫。
もう我慢できないと思った時には、
きっと楽になるからね。

彼女は大きく眼を開けてうなずきました。

それから三時間ほどで
マミちゃんの苦しみは無くなってしまったのです。

今朝の五時八分でした。

(細谷亮太 「川の見える病院から」 より)



この映画のタイトル『大丈夫。』は、
子どもたちを診察するときに一度は必ずつぶやく
細谷亮太医師のログセから名付けられました。

それは、小児がん治療の最前線に立ち続ける
自分自身への励ましのコトバでもあるようです。

大丈夫。

小児科医・細谷亮太のコトバ

序

「大丈夫。」
辛いことも多いけど、生きることは捨てたもんじゃない。

伊勢 真一
(映画『風のかたち』『大丈夫。』監督)

小児がんはもう、不治の病ではありません。現在、全国におよそ2万5千人いると言われる小児がん患者の10人のうち、8人までもが治っているのです。確かに、一時代前まで、死に至る病として恐れられていたのですが、医学の進歩は、20世紀後半から、小児がんを“治る病気”に変えたのです。

恥ずかしいことに、私がそうした事実を知ったのも、細谷亮太医師がリーダーをつとめる、小児がんの子どもたちのキャンプに参加してからです。

細谷亮太医師（小児科医・聖路加国際病院副院長）と出逢ったのは12年前の冬。

「伊勢さん、小児がんの子どもたちが年に一度集まるサマーキャンプの映像記録を撮ってもらえませんか？ 伊勢さんは長期のドキュメンタリー映画が得意なようなので…」という、仕事のプロポーズでした。

頼まれると断るのが苦手な私は、その依頼を受け、スタッフを引き連れ毎年のキャンプを記録し、聖路加国際病院での細谷医師の仕事ぶり等を10年間にわたって追い続けました。

10年間の記録は、映画『風のかたち—小児がんと仲間たちの10年—』（2009年／105分、文化庁映画賞、日本カトリック映画賞、キネマ旬報ベストテン3位）として、子どもたちの蘇る命の力を見届け、成長を見守る「再生」の物語となりました。

カメラは子どもたちだけでなく、医療の現場でずっと子どもたちを見守り続けてきた細谷亮太医師の10年間をも記録しました。小児がんの子どもたちをサポートする前線で、自分自身にも語りかけるように「大丈夫。」とつぶやく、命へのやわらかな、しかし強い眼差し。編集室には10年間にわたって、キャンプで、病室で、診察室で、問わず語りのように話してくれた細谷医師の想いのこもった膨大なコトバが、未使用のまま眠っていました。

「あそこまで、ちゃんとしなやかに立ち直って、ポジティブに生きられるっていうのは、たいしたものだと思いますね。…捨てたもの

じゃないっていうか。人間は強くつくってあるんだ。ポジティブに上手に経験を利用して他の人にも影響を与えながら生きていけるって、とてもカづけられますよね。」

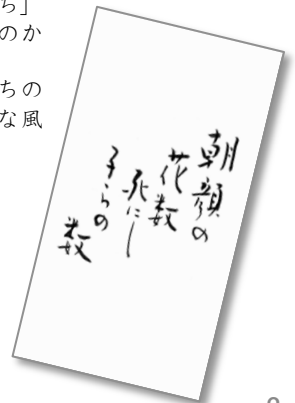
「生きることが叶わなかった子どもたちも、自分のまわりにやって来て、一緒にキャンプをやっているような気がしています。亡くなった子どもたちもみんなの中で生きているとうか…」

細谷医師の想いを、そのまま伝えるようなヒューマンドキュメンタリーを創ってみよう。10年間に及ぶ発言記録とともに、40年間に及ぶ俳人・細谷嘯々の世界を交え、語ることができなかった胸の内にも触れ、子どもたちの命と向き合い続けた、ひとりの男の想いを知ってもらおう…。

「医者はどうなにか辛くても、燃え尽きてしまっただけいけない、というプロ意識のようなものがあります。そんな私にとって、俳句は、大変なときに友達に話を聞いてもらうのと同じように、自分の心のバランスを保つための大切な趣味というか、生きるための杖のようなものかも知れません。」

40年間近くにわたって小児がん治療の最前線に立ち続けてきた細谷亮太医師の「いのち」への想いを描いたこの作品は、映画『風のかたち』の姉妹編のような映画です。渇いた時代、渇いた社会と呼ばれる私たちの今に、しっかりとした水分と、さわやかな風を届けてくれるにちがいありません。

「大丈夫。」
辛いことも多いけど、
生きることは捨てたもんじゃない。



(細谷亮太医師自筆の句)

大丈夫。

小児科医・細谷亮太のコトバ

物語の舞台と主人公



細谷 亮太 (ほそや・りょうた)
小児科医・俳人



SMSサマーキャンプ

(スマートムンストーン サマーキャンプ)

細谷亮太(聖路加国際病院 副院長)、月本一郎(済生会横浜市東部病院小児医療センター長)、石本浩市(あけぼの小児クリニック院長)、3人の小児科医が中心になり、1998年から続けられているサマーキャンプ。毎夏、3日～4日間、自然に恵まれた地でキャンプをする。参加者は、小児がん当事者、ボランティア、医療関係者含めて約100人。ボランティアのほとんどは、かつて小児がんを体験した元患者である。

聖路加国際病院

SMSサマーキャンプのリーダーである細谷亮太医師の医療現場。小児科病棟での入院患者たちとの日々、細谷医師の仕事振りやインタビューを撮影させてもらった。

1948年山形県生まれ。東北大学医学部卒。小児がんの先端的治療技術研修のため、米国テキサス大学総合がん研究所M・Dアンダーソン病院に3年間赴任。現在、聖路加国際病院副院長・小児総合医療センター長。小児がん医療の最前線に関わりながら、キャンプをはじめ積極的に啓蒙活動に取り組んでいる。また、映画『風のかたち—小児がんと仲間たちの10年—』の企画者であり、俳人・細谷亮々としても知られている。

主な著書に『小児病棟の四季』(岩波現代文庫)、『医師としてできることできなかったこと—川の見える病院から』(講談社+α文庫)、『いつもいいことがし』(暮しの手帖社)、『生きようよ』(岩崎書店)など、俳人として『生きるために、一句』(講談社)、句集『桜桃』(東京四季出版)、『二日』(ふらんす堂)などがある。



そらぶちキッズキャンプ

日本では、約20万人の子どもたちが小児がんや心臓病などの難病と闘っているといわれている。子どもたちは辛く厳しい闘病生活の中で、自然とふれあう機会がほとんど無いのが現状であり、「外で遊びたい、それが夢だ」という子どもたちがいる。子どもたちの夢を叶えるため、「病気と闘う子どもたちの夢のキャンプ場をつくろう」という思いが、北海道滝川市丸加高原に結集し、できあがったのが「そらぶちキッズキャンプ」の計画だ。

細谷医師は、このキャンプ計画のリーダーであり、2012年春のオープンを目指し、仲間たちと夢の実現のために奮闘中である。

大丈夫。

—小児科医・細谷亮太のコトバ—

映画に寄せられたご感想

あえて何も言えないことは、
言葉でかざらなくてもいいですね。
(50代・女性)

普通なら反抗期の小児がんの子が、
「親に心配をかけたくない」
「苦しみを活かして医者になりたい」など、
一足飛びに大人になってしまった気がして、
切なくなりました。

(50代・女性)

生きることとは、受け入れることなのだ。
喜びも悲しみも、
全て受け入れることなのだ、
改めて心に刻みました。

(40代・男性)

深刻な病気となると、本人も家族も周りも、
笑いが日常から遠いものになりがちですが、
そんな中でも前向きに受け止め、自立している姿が、
素晴らしいと思います。また観たいです。
5才、7才の子どもも一緒に観ましたが、
子どもなりに一生懸命観ていました。

(40代・男性)

夢を持っている子どもたちが死んでいくのは、
とてもかわいそうだと思う。
細谷亮太さんは色々な意味ですごいと思った。

(10代・男性)

暖かい大丈夫、力強い大丈夫が、
どこからか来てほしい。
病む人に、病んだだけの救いを、と思う。
(無記名)

「助けてもらったから、助けたい・・・」と言った男の子が、
15歳で亡くなったというのは、とてもせつなかった。
つらいことがあるとすぐ「死にたい」と思う自分だけれど、
どんなに生きてくても生きられなかった子どもたちのことを思うと、
“とにかく”生きていかなくてはならない、と思いました。

(40代・女性)

生きること、
今生きている自分はどうしたら良いのだろう。
「即答せよ。」と
質問を突きつけられたような気持ちになりました。
(50代・女性)



大丈夫。

小児科医・細谷亮太のコトバー

スタッフ

映画『大丈夫。—小児科医・細谷亮太のコトバー—』

2011年／カラー／85分 《2011年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第1位》

出演 細谷 亮太
(聖路加国際病院)

協力 スマートムンストン 聖路加国際病院
細谷医院 財団法人がんの子供を守る会
毎日新聞社 キープ自然学校
そらぶちキッズキャンプ
石本 浩市
(あけぼの小児クリニック)
月本 一郎
(済生会横浜市東部病院こどもセンター)
本橋 由紀 中島 晶子 近藤 博子
鈴木 彩 渡邊 輝子 横川 めぐみ

キャンプに参加した子どもたち
鈴木 珠生 川田 智之 中川 太郎
高遠 翼 清水 晶子

撮影 石倉 隆二 世良 隆浩

照明 箕輪 栄一

音響構成 渡辺 丈彦

録音 永峯 康弘

編曲 横内 丙午

チェロ演奏 白神 あき絵

編集技術 田辺 司

撮影協力 内藤 雅行 田辺 司
東 志津 宮田 八郎

制作 米山 靖 助川 満

題字 細谷 亮太

宣伝デザイン 森岡 寛貴
(ジオングラフィック)

スチール 坂井 信彦

上映デスク 保田 則子

製作協力 ヒポコミュニケーションズ
一隅社

製作 いせFILM
スマートムンストン関連映画製作委員会

演出 伊勢 真一



©Go itami

演出・伊勢 真一 (いせ・しんいち)

映像作家

1949年東京生まれ。『奈緒ちゃん』『ぴぐれっと』『ありがとう』『朋あり。』『ゆめみたか』『白い花はなぜ白い』をはじめ、多くのヒューマンドキュメンタリーを製作。近年は若手の作品プロデュースも積極的に手がけている。

日常をふんわりと映し出す映像の中に、生きることの素晴しさが込められた独特の作風で知られる。

映画『風のかたち—小児がんと仲間たちの10年—』

(文化庁映画賞、日本カトリック映画賞、キネマ旬報ベストテン3位)。

大丈夫。

—小児科医・細谷亮太のコトバ—

上映について

伊勢真一監督のヒューマンドキュメンタリー映画は、自主製作の処女作『奈緒ちゃん』（1995年）以来、20余年にわたり全国各地の様々な地域で、主に自主上映会によって観られてきました。

“映画は観客と出会い、はじめて映画になる……”
という考えをモットーに、上映活動に取り組んでいます。

映画『大丈夫。—小児科医・細谷亮太のコトバ—』も、自主上映を募り、上映の輪を広げたいと考えています。



映画 『大丈夫。—小児科医・細谷亮太のコトバ—』

2011年/カラー/85分

4:3 DVカム・DVD

小児科医・細谷亮太のコトバ

大丈夫。

《お問合せ先》

いせフィルム

<http://www.isefilm.com/>

TEL: 03-3406-9455 / FAX: 03-3406-9460

E-MAIL: ise-film@rio.odn.ne.jp